

【一般演題3】 第13席

『難經集注』における楊注について

宮城 浦山 久嗣

『王翰林集註黄帝八十一難經』五卷は『難經集注』と通称され、また、歴代の注釈者を数えて『十家注本難經』とも呼ばれる。この書は北宋以前における『難經』の注釈の諸相を窺い得る殆ど唯一の資料であるが、その内容ばかりか、成立や伝来にも、いまだに多くの問題が残されたままである。

『隋書』経籍志には既に、“『黄帝八十一難經』二卷”の書名が見え、その注に、“梁に『黄帝衆難經』一卷、呂博望注有り。亡ぶ”

とあり、この「呂博望」とは三国時代の呉の太医令である呂広とされる。

また、『難經集注』に集録されている楊玄操の自序には、

“今輒ち条貫編次し、類例をして相い従わしむ。凡そ一十三篇を為りて、旧きに仍ること八十一首。

呂氏の未だ解せざるは、今並びに註釈し、呂氏の注の尽くせざるは、因りて亦た之を伸ぶ。並びに別に『音義』を為りて、以て厥旨を彰かにす。”

とある。楊玄操は『隋書』では減んだとされた『黄帝衆難經』を基にし、呂広注に重ねて注釈するに止まらず、『難經』を類似した内容ごとにまとめ直した。これによって、呂広注の旧態を失うことにはなったが、『難經集注』の原形である呂楊注『難經』が北宋までは存在することができた。

『難經集注』の各巻頭に見える十名の註釈者の中には「楊玄操」と「楊康侯」という二人の楊氏の名が記されているが、書中の「楊曰」の註釈部分が「楊玄操」のものなのか「楊康侯」のものなのかは明確にされていないが、多紀元胤の『医籍考』には、

“殆ど康侯なる者の云へるに出づること無きに似たり。”

といい、楊康侯の注釈を認めていない。

発表者は一昨年、第二回の本学会において、“『難經集注』における「呂注」の位置について”を発表し、一応の成果を報告することができた。今回の発表は、「呂注」に引き続き「楊注」の内容とその周辺について分析検討を試みるものである。